

# 教育センター通信

## ほど 火床の火の心を紡ぐ

第4号（通算第43号）  
平成29年7月24日  
三条市小中一貫教育推進課  
教育センター 発行



瑞穂学園あいさつ運動  
(6月19日、月岡小学校)

### 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて

小中一貫教育推進課 統括指導主事 本多 真人

新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善を行うことが提唱されている。では、どんな点に留意して授業を変えていけばよいのか。次の3点が大切だと考える。

#### 1 「次（つぐ）」の指導計画を丁寧に立てる

「主体的・対話的で深い学び」は単位時間の中で全てが実現されるものではない。むしろ複数の授業（「次（つぐ）」）を通して成立する。「次」は学習内容のまとめりであり、追求の一里塚である。子供が「次」ごとの学習内容を獲得していくことで、単元・題材の目標は達成される。問題解決的な学習過程を軸に、「次」と「次」同士のつながりを大切に単元・題材の指導計画立案が大切だ。

#### 2 子供の問題意識に支えられた学習問題（◎）を設定する

子供の実態を基に教材やその出合わせ方を工夫し、子供が見方・考え方を顕在化しながら事象の意味を考えたり、自力解決をしたりできるようにする。そして、自他の捉えや考えのズレから「明らかにしたいこと」を子供と共に見出し、学習問題をつくる。子供の問題意識の高まりを見取りながら、個々の問いを汲み取って言語化し設定するのである。単元・題材名をそのまま板書したものや教師から一方的に提示したものでは子供の見方・考え方は触発されず、深い学びには至らない。

#### 3 学習問題解決のための課題を基に学習活動を組織する

学習問題が設定されると、「解決するには〇〇しなければならない」といった課題が見えてくる。この課題に応じ、「個々に調べ、考える活動」「協働して話し合い・検討する活動」等を、効果的な時間配分も考慮して設定、組織していく。

「主体的・対話的で深い学び」は子供が個々の見方・考え方を発揮して考え、他と協働しながら最適解を探っていく過程で実現する。子供の実態や児童生徒理解の上に立った授業づくりが基本となる。フルモデルチェンジではなく、今の授業実践を振り返って評価し、マイナーチェンジをしていくのだ。「『主体的・対話的で深い学び』は一単元・一題材で一つずつ実現していく」といった構えで、実践してはどうだろうか。

## 第2回学園長会議 7月6日

先月末までに、9つの学園において、今年度第1回小中一貫教育推進協議会が開催され、各学園のグランドデザイン及び小中一貫教育推進計画が承認されました。それを受けて、7月6日に学園長会議を開催し、各学園のグランドデザイン等について、情報共有を行いました。



学園長会議の様子

各学園のグランドデザインに示されている「目指す児童生徒像」は以下のとおりです。

学園名	目指す児童生徒像
三条嵐南学園	ふるさと三条に誇りを持ち、個性を輝かすことのできる子ども ※「個性を輝かす」：自分のよさを発揮してたくましく生きる
一ノ木戸ポプラ学園	豊かな関わりの中で自分を見つめ、 新たな自分との出会いを続ける子ども
三条学園	【学 び】 よく考え、自ら学び続ける児童・生徒 【こころ】 思いやりにあふれ、認め合える児童・生徒 【からだ】 心身ともにたくましく、自ら鍛える児童・生徒
四つ葉学園	9年間の学びの中で 絆を深め、ともに伸びる子ども
瑞穂学園	自他を尊重し、夢や目標の実現に向かって努力する子ども
大崎学園	将来の夢や希望を持ち、広く仲間や地域と共に生きる児童生徒
三条おおじま学園	ふるさと大島を愛し、たくましく未来を拓く子どもの育成 ○伝え合い、学び合う児童生徒      ○相手を思いやる児童生徒 ○地域の一員として、人やものを大切にする児童生徒
さかえ学園	自分に自信を持ち たくましく生きる さかえの子
しただの郷学園	しただを愛し、互いに高め合い、やりぬく子



さかえ学園グランドデザイン(参考)

各学園長からは、小中教職員が教科グループで指導の構想を考える研修、乗り入れ授業の拡充や見直し、小小交流活動の充実、防災教育や眠育の取組等の説明があり、各学園の特徴的な活動の情報交換を行うことができました。

※各学園のグランドデザインは、後日三条市のホームページ、「みんなで創る小中一貫教育」に掲載する予定です。是非ご覧ください。

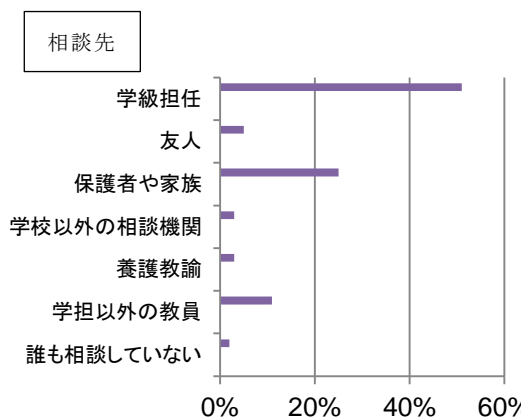


1. 三条市内の状況（平成 28 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査より）

(1) いじめについて

市内の認知件数は91件であり「冷やかしゃからかい悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」が最も多く、全認知件数の4割となっています。最近の傾向として小学校低学年で多く発生してきています。いじめを積極的に認知しようとする学校の姿勢が件数増となっています。

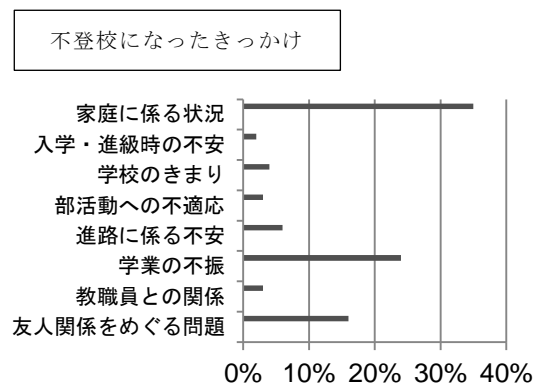
いじめを受けた児童生徒の相談先で最も多かったのは学級担任であり、次に多かったのが保護者や家族でした。（右表参照）本人や保護者からの訴えが半数以上で認知されているということは、日頃の教育相談が機能しているということです。始まりは軽微ないじめです。それが深刻化しないように組織としての対応をお願いします。



(2) 不登校について

市内不登校の現状として平成 28 年度は 27 年度と比較すると増加しました。（発生率も増加傾向）右表が不登校になった主なきっかけです。

市内の結果から、学校に係る状況は「友人関係をめぐる問題」「学業の不振」になりますが、家庭に係る状況のきっかけが特に高くなっています。支援を必要とする子どもと保護者が多くいるという実態が見られます。



27 年度から継続している不登校児童生徒は全体の 47%です。新たに不登校を出さないという学校の取組が必要となります。定期的な欠席が見られたり、保護者からの連絡がなく欠席する等、様子がおかしいと思った時は速やかな対応をお願いします。また、遠慮せずに関係機関（市教委、適応指導教室、児童相談所、医療機関等）と積極的に連携してください。

2. 夏季休業中における留意事項

(1) 交通事故について

自転車乗用中の交差点での事故が市内で発生しています。夏季休業中は、子ども達が自転車に乗る機会が増え外出する機会も多く開放的な気分になることから、交通事故が多発する傾向にあります。今後も児童生徒の「安全」な生活のために、自ら危険を回避する能力を育成するとともに、夏季休業前の交通安全指導を徹底するとともに保護者への働きかけをお願いします。

(2) 不審者対応について

1 学期に 9 件の不審者情報が市教委に寄せられました。不審者の情報は一刻も早く警察へ通報することが必要です。保護者は学校に報告することを優先しがちですが、即 110 番に通報し、その後学校へ報告することを御指導いただければと思います。

(3) 自殺予防について

自殺はある日突然、何の前触れもなく起こるというのではなく、長い時間かかって徐々に危険な心理状態に陥っていくのが一般的です。リスクの高い児童生徒については、必ず保護者と連携して定期的に様子を確認するなど継続的な支援をお願いします。H29.6.12 付け教義第 449 号の 2「児童生徒の自殺予防に係る取組について」（通知）、H29.6.21 付け教義第 505 号「児童生徒の生命を守る取組について」（通知）を再度確認ください。



# 「主体的・対話的で深い学び」をどう実現するか？

平成 29 年度 小中一貫教育実践研修 新学習指導要領対応研修 6月 27 日(火) 15:00~(楽府

会)

新学習指導要領は、小学校は平成 32 年度、中学校は平成 33 年度から全面実施となります。子どもたちの現状と課題を踏まえつつ、学ぶことの本質的な意義や強みを改めて捉え直し、一人一人の学びを後押しできるようこれまでの改訂の中心であった「何を学ぶか」という指導内容の見直しに留まらず、「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」までを見据えての改善です。そこで、「新学習指導要領のキーワードの一つ『主体的・対話的で深い学び』」についての理解を深め、授業改善への道筋を構想する」ことを目標に研修しました。(参加者：市内外教職員 44 名) 講話の一部から紹介します。

岩崎先生：「先生方は、今回の改訂をどのように受け止めていますか？」(開会早々に参加者が隣同士でシェアしました。)

A 先生：「主体的・対話的で深い学び」はとても理想的で素晴らしいです。今までももちろんそうなるようにはしているんですけど、やはり自分のクラスを見るときにそこまでいけない子もいますので、具体的にどういふふう



## ■「カリキュラム・マネジメント」をシンプルにとらえたい

ももとは、「授業研究にマネジメントを載せる」という発想です。研究授業を公開したり、普段の授業実践を参観して意見交換したりするという点の取組をラインに乗せてみる、あるいは面に広げると受け止めて考えれば簡単になってくる。要するにそれは、①授業研究のリーダーは誰がとるか②どの組織が担うか③授業研究を促進する組織文化や風土をどう醸成するかということ。これが、本来の意味の「カリ・マネ」なんです。日常的に授業研究、授業改善(授業改革)を図っていくシステムづくりのこと。これが本来の意味の「カリ・マネ」です。

## ■ 目的・場面に依じてハイブリッドに使い分けろ！

分かると子どもは楽しくなる。だから学びたくなる。楽しい会話の中で、「あっ、勉強っておもしろいな。もっともっと知りたいよ。もっともっと情報がほしいよ。」って子どもたちが自分から情報を取りに行く。その結果として中身が分かるようになっていく。“アクティブ・ラーニング絶対”と決め付けるのではなくて、その授業の目標・場面側面に合わせて、「知識の伝達」での学びの実践と「知識の創出」での学びをハイブリッドに使い分けていくことが大事。一つの単元一つの題材を見通す中で、ここは一斉授業でやる、だけどここはみんなでアクティブ・ラーニングを続ける。単元単位のスパンで授業の組立て・構成を考えていく。一単位授業の中だけでこれもあれもと考えるとそれは無理です。アクティブ・ラーニングをするのが目的なのでなくて、それは手段です。バランスのとれた理解を。



## ■ ちょっと違う視点を当てて、もう一回授業を見つめ直して

「主体的・対話的で深い学び」を小学校段階でやるとすると、子どもにグループをつくって、ホワイトボードをあげて、あるいは、模造紙をあげて書くだけ書かせなければならないのか。もちろんそれができればベストですが、「ねばならない」ということではなくて、先生方が従前から行っている子どもの答えをしっかりと黒板の上で書き足し入れさせながら対話のある学びを先生が担っているといういわゆる一斉授業をもう少し整理してやってみる。特に若い先生が増えてくる中で、授業の基礎的な部分でも大事なことかなと思います。中学校、高校であれば、それを糧に少しずつ発達段階、学習進度に応じて取り入れていく場面を増やしていただきたい。そうすれば、何も「主体的・対話的で深い学び」は差し当たりのいいことではなくて、今まで私たちが当たり前のように一生懸命やってきていることにちょっと違う視点を当てて、もう一回授業を見つめ直してみようよというふうに受け止めていただいて、自信をもって校内研修を進めていただければと思います。

「主体的・対話的で深い学び」と「カリキュラム・マネジメント」は一体として捉えて学校全体の機能を発揮していく必要があります。形式的に対話を取り入れた授業や特定の指導の型を目指した技術の改善にとどまることがないよう取組を進めていきたいと思ひます。

### ～ 参加者の「声」から ～

- ◇「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業実践、具体的な子どもの姿などがイメージできると更によいと思ひました。
- ◇研修で学んだことを職員に伝え、「教師一人一人がアクティブに学び合う」職員集団を目指したいと思ひます。
- ◇「主体的・対話的で深い学び」について、結局今まで頑張ってきたことと何ら変わることなく、ただ違う視点をあてて、もう一度考え直そうよというメッセージなんだということがとても印象的で納得しました。ただし、主体的・対話的な活動があれば深い学びに行きつくとは必ずしもいえないのではないかなと思ひます。
- ◇学校で実践していることや大切にしていることが、新指導要領で目指すところとつなげて少し整理されたと思う。実際の授業で実践となるとうまくいかないことや課題がたくさんあるが、チャレンジし続けたいと思う。

